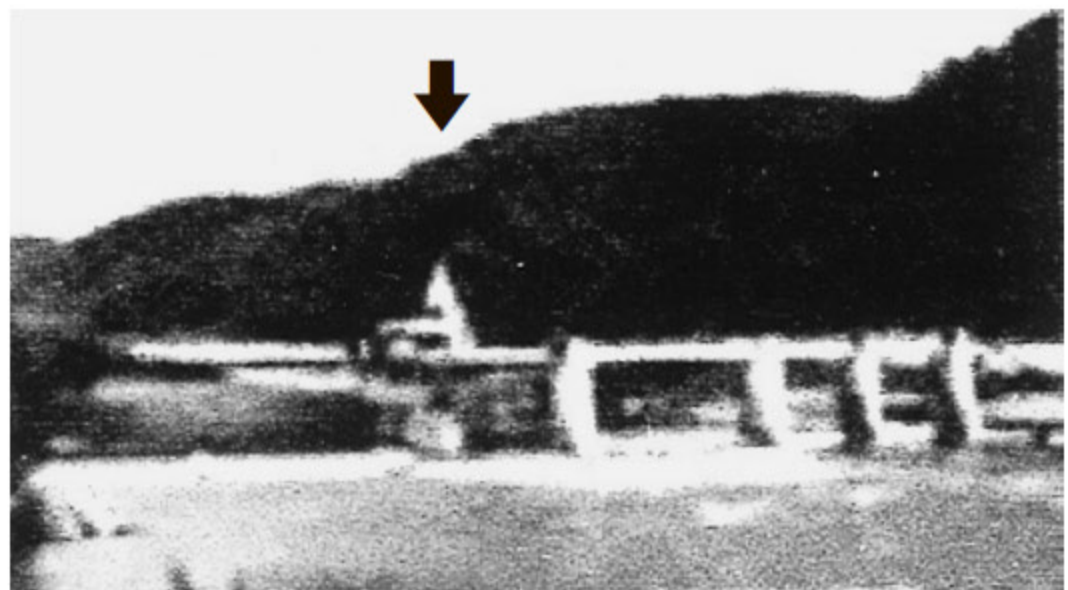


丸木舟による交通時代の石狩川の最大の難所がカムイコタンだった。下流からカムイコタンに着いた丸木舟は、神居大橋付近のシキウシバ(荷物背負場)で、丸木舟から荷揚げして、荷物は歩行して運び、ハルシナイに丸木舟がないときは、丸木舟は空舟にして引き上げ、ハルシナイから再び上流へ向かうのであった。

現在は、掲載地図のように、ハルシナイ(春志内川)のすぐ上流に、神竜頭首工が設置されている。写真①②のように石狩川に堰堤を築き、ここから農業用水を取り水するのが、頭首工である。神竜頭首工の上流左岸には、掲載地図のように、ニツネカムイ覆道がある。位置関係を知る上で、掲載したものである。

神竜頭首工は、石狩川中流沿岸に開けた北空知の穀倉地帯の深川や秩父別、旭川の農地に水を送る水利施設である。その歴史を見ると、大正十一年に神竜土功組合が設置され、現頭首工



①神竜頭首工—昭和36年完成の頭首工



②神竜頭首工—平成元年完成の頭首工



③平成18年—上流からの冬の頭首工

ハルシナイと神竜頭首工

から約六百坪下流から、非常な難工事の末に取水し、灌漑溝が昭和二年に通水し、深川などが開田した。しかし、堰堤がないために、取り水施設の維持管理に莫大な費用を要した。

昭和二十七年に国営灌漑排水事業が行われ、昭和三十六年に、写真①神竜頭首工が完成する。さらに、農業の近代化などから、神竜、深川、空知の三つの水利区域の水田の用排水施設の改良と、畑地の灌漑を目的に、写真②の現在の頭首工が、平成元年に改良新築された。写真③は、平成十八年三月

八日に、上流から、左にニツネカムイ覆道をとらえ、水を止めていない状態の神竜頭首工を撮影したものである。写真①、②、③の↓は、ニツネカムイ覆道を指している。

写真①は、インターネットの「水と里ネット」からの転載であるが、ここには大正十三年からの工事の苦闘ぶりが見える写真が掲載されているので、是非ご覧いただきたい。

昭和三十六年の初代の神竜頭首工を見て、ここに頭首工を築いた発想に驚いたが、実は明治七年にハルシナイ

所の設置を提案しているのである。ライマン一行は、明治七年六月十七日、札幌の豊平川を出発、石狩川を遡り、その水源から十勝川上流へ山越えし、十勝川を下って、太平洋岸の大津に下る予定であった。

途中の支流を調査しながら、鴨居古丹(来曼氏北海道記事)の表記)には、七月十一日に到着した。七月十二日にはハルシナイにキャンプ、十三日にこのハルシナイから、四十八人のアイヌの人たちが、十一艘の丸木舟を漕ぎ、ライマンを含めて総勢五十六人で上流へ出発する。

ライマンは鴨居古丹の調査から、「鴨居古丹ノ下端ニ於テ、高サ五十五尺乃至六十尺ノ堤ヲ築カバ、其両側ニ山アリ、水流ニ密接スルヲ以テ、其長僅ニシテ足ルベシ。蓋シ、其堤ノ上部二百碼ニ過ギサル位(川幅ハ恐ラク一百尺許)ニテ充分ナラン。」と述べている。

その後石狩川の旭川地域で、ライマンは、天皇の上川行幸と、「避暑宮(summer palace)」「温泉場(baths)」の建設提案をしている。これは、後の岩村通俊や永山武四郎の北京・離宮設定論の嚆矢といえるものなので、神竜頭首工もライマンの鴨居古丹の堤(堰)がヒントだったかも知れないと、思いを馳せた次第である。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します

断章 旭川のアイヌ語地名研究

75

高橋 基



から上流に向かった、開拓使御雇外人の地質学士兼鉱山師長のライマンは、カムイコタンの最下流部に堰堤を築き、水車機械